



2021 年度

地理科学学会 春季学術大会

一般研究発表 要旨集

日 時 : 2021 年 6 月 19 日 (土) 9:30~11:35,13:30~17:15

開催方法 : オンライン (zoom)

地理科学学会

## ❖プログラム❖

### ■口頭発表

座長 熊原康博 (広島大)

9:30-9:45 堀本一樹\*(広島大・院):全国の離島における自然環境と社会の関わり  
の計量的把握の試み

9:45-10:00 山中 蛭\*(広島大・院)・後藤秀昭(広島大)・岩佐佳哉(広島大・学振 DC)・  
清原寿樹(広島大・学):糸魚川-静岡構造線活断層系の白州断層の活動  
履歴-尾白川右岸におけるトレンチ調査結果-

10:00-10:15 河本大地\*(奈良教育大):記憶に残る地域学習とは

10:15-10:30 南埜 猛\*(兵庫教育大)・本岡良太(播磨町立蓮池小):日本の溜池分布  
論再考 第3報

### 10:30-10:35 【休憩】

座長 河本大地 (奈良教育大)

10:35-10:50 横川知司\*(広島大・院)・岩佐佳哉(広島大・学振 DC)・住谷侑也(広  
島大・院)・原田 歩(広島大・院):東広島市西条町における伝統行  
事「とんど」を用いた小学校社会科の授業実践

10:50-11:05 陳 鈺珊\*(広島大・院):ローカル線から観光列車までの鉄道観光の歩  
み:伊予市双海町の事例から

11:05-11:20 富田大智\*(林野庁近畿中国森林管理局):兵庫県但馬地域における但  
馬牛関連碑の分布とその特徴-3つの蔓牛に着目して-

11:20-11:35 久保哲成\*(兵庫県立柏原高/兵庫教育大・院):中学校社会科地理教科  
書掲載の景観写真の質・量的変化と読み取り技能について

11:35-13:30 【総会・昼食】午前の発表で不具合が生じた場合は、11:35-11:50の  
間に発表を行います。

座長 南埜 猛(兵庫教育大)

13:30-13:45 佐藤拓実\*(元広島大・学)・熊原康博(広島大):第二次世界大戦下の  
広島市街地における建物疎開の分布とその特徴

13:45-14:00 沈 彧馨\*(広島大・院):広島県における平成期の神社の管理の変化  
-広島県神社誌と神社庁資料との比較-

14:00-14:15 岩佐佳哉\* (広島大・学振DC)・杉山愛実 (広島大・学)・村上正龍 (広島大・学) : 郷土資料に基づく1945年枕崎台風による死者数の再検討と地図化

14:15-14:30 勝又悠太郎\* (広島大) \*・Thakur Gajender (広島大・院)・赤井理子 (広島大・院)・月森義基 (元広島大・学) : インドにおける新型コロナウイルス (COVID-19) 感染動向の地域的特徴—2020年の州別データの分析を中心に—

**14:30-14:35 【休憩】**

**座長 宇根義己 (金沢大)**

14:35-14:50 劉 雅茜\* (広島大・院)・フंक カロリン (広島大) : 広島、境港、神戸に訪れたクルーズ観光者の行動と満足度の比較

14:50-15:05 松井恵麻\* (大阪市大・院) : アート作品による空間の創出と場所性の表現

15:05-15:20 田 宇博\* (立命館大・院) : 大阪市における中国人ニューカマーのエスニック・ビジネス空間—日本橋・島之内地区を中心に—

15:20-15:35 劉 暁一\* (広島大・院) : 児童文学の中の地理空間と作者の「原風景」—コロボックル物語を事例に—

**15:35-16:15 【休憩】 発表で不具合が生じた場合は、15:35-15:50の間に発表を行います。**

**座長 和田 崇 (県立広島大)**

16:15-16:30 筒井一伸\* (鳥取大)・渡辺理絵 (山形大) : 「コミュニティ」の機能再編と資源活用—山形県鶴岡市三瀬地区を事例に—

16:30-16:45 吉田国光\* (金沢大) : 井の上の能登らしさ—地域性と消費—

16:45-17:00 杉浦真一郎\* (名城大) : 地域包括ケアシステムをめぐる圏域の再編と地域包括支援センターの再配置

17:00-17:15 成瀬 厚\* (独立研究者) : 2020年東京五輪大会におけるホストタウン—登録自治体へのアンケート調査結果報告—

**17:15 【表彰式】 午後の発表で不具合が生じた場合は、17:00以降に発表を行います。**

## ◆口頭発表

## 全国の離島における自然環境と社会の関わり 計量的把握の試み

堀本一樹\* (広島大・院)

離島における自然環境と社会との関わりを論じた過去の研究は、個々の島々に着目しその実態を詳細に明らかにする研究が多く、複数の島の比較や計量的な把握によって明らかにすることを試みた研究はそれほど見られない。そこで、新型コロナウイルスの流行により現地調査が行いづらいうち現状も踏まえ、離島の自然環境と社会の関わりを計量的に把握することを試みた結果を報告する。

まず、全国の離島を俯瞰した際に見ることができる関わりを明らかにするために、変数として人口・産業別人口や島の地形・位置・気候に関するデータを用いた多変量解析を行った。その結果、牧草地が他の農業の立地が不便なところに立地する傾向などが見られた。続いて、大きな島の地域間差異について着目するために長崎県の離島について小地域集計を用いたクラスター分析を行ったところ、中心地-郊外の構造や地形の複雑さと集落の多様性との関連の一端が確認できた。

## 糸魚川-静岡構造線活断層系の白州断層の活動履歴 —尾白川右岸におけるトレンチ調査結果—

山中 蛍\* (広島大・院)・後藤秀昭 (広島大)・岩佐佳哉 (広島大・院; 日本学術振興会特別研究員 DC)・清原寿樹 (広島大・学)

糸魚川-静岡構造線活断層系(以下 ISTL)では、北部の神城断層の再活動により 2014 年長野県北部地震が発生した。この地震は従来の想定を下回る規模であったため、その後、断層の繰り返しモデルについて活発に議論されている。本研究では、固有地震説の検証を目的として、南部の白州断層でトレンチ調査を実施した。航空レーザ計測によって得られた地形データから詳細な地形判読を行い、並走する断層トレースがなく、白州断層全体の古地震を代表し得る、尾白川右岸を調査地として選定した。トレンチ壁面には、西傾斜約 20 度の低角な逆断層が出現し、最近 2 回の古地震イベントが検出された。最新イベント時期は ISTL 北部~中部で推定される歴史地震よりも古く、変位様式が変化する地点がセグメント境界となっていることがより明確になった。最新イベントでは ISTL 南部全体が活動した可能性がある一方、一つ前のイベント時期は既往研究では検出されていないものであり、最新イベントに比べて小規模な地震であった可能性が考えられる。

## 記憶に残る地域学習とは

河本大地\* (奈良教育大)

学校教育における地域（郷土）学習の何が後々まで学習者の記憶に残るのかを検討した。地域学習（本研究では社会科等に限定せず、県レベル以下のスケールに関わるすべての学習を対象とする）の目的は、自然や社会に対する認識の基盤形成、地域の経験や文化（たとえば開拓や災害、産業発展、郷土芸能など）の継承、地域に対する愛着や誇りの形成、地域の未来を形作る人材の輩出などさまざまである。しかし、肝心の学習者が何を経験し学んだのか数年後に忘れ去っているようでは、目的が達成されたとは言い難い。一方で、地域を軸にした、学年や校種、教科等を超えたカリキュラムマネジメントは、その地域で人が育つことの意味の再確認や、地域に関する学びの体系化、地理的事象への関心の喚起や持続につながる。

そこで、奈良教育大学教育学部の選択必修科目「ESD と学校教育」の授業時に Web アンケートを行い、受講者に自らの地域学習の経験を思い出してもらった。2020 年度前期に 56 名、2021 年度前期に 40 名（いずれも出席者全員）から回答を得た。また、2020 年 7 月に発表者らが開催したシンポジウム「新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) と ESD 地域学習」の参加申込フォームに関連する設問を含め、83 名から回答を得た。分析結果の詳細は、発表時に報告する。

## 日本の溜池分布論再考 第 3 報

南埜 猛\* (兵庫教育大) ・本岡良太 (播磨町立蓮池小)

2019年に「農業用ため池の管理及び保全に関する法律」（以下、溜池法と表す）が成立・施行された。溜池の所有者は所有する溜池すべてを都道府県知事に届出（溜池の名称、住所、堤高、堤頂長、貯水量の諸元データを含む）することが義務化された。また都道府県知事は、それらの情報をデータベースとして整備するとともに、インターネットの利用などを通じて公表することとなった。結果、溜池法の成立により、全国約16万箇所溜池についての基礎的な情報が整備・公表されることとなった。

本報告では、溜池法に至る近年の溜池にかかわる動向、溜池法の内容、都道府県の溜池に関する情報公開の状況、ならびに情報開示請求により入手した溜池データの検討と兵庫県を事例にした溜池の分布やデータ精度に関する検討結果を報告する。検討の結果、これまでのデータベースと比較して、溜池の収録数が増え、位置データの精度は大きく改善された。その一方で、位置データ以外の諸元データについては、さらにデータを修正・整理する必要のあることが明らかとなった。

## 東広島市西条町における伝統行事「とんど」を用いた 小学校社会科の授業実践

横川知司\* (広島大・院)・原田 歩 (広島大・院)・  
住谷侑也 (広島大・院)・岩佐佳哉 (広島大・学振 DC)

本発表では、東広島市西条町の伝統行事「とんど」を題材とした、小学校社会科の地域学習に関する授業実践を報告する。本実践は、小学校社会科の学習指導要領の目標である「地域の伝統と文化や地域の発展に尽くした先人の働きについて理解する」に対応している。また全国で実施されている「とんど」の教材化は、伝統行事の維持に関する地域的課題を都市や農村といった地理的条件と関連させて授業を構成することにより、小学校社会科の地域学習の学習材として適している。

授業は東広島市内の御菌宇小学校の第4学年を対象に2回行い、1回目では「とんど」を維持する人々の意識を理解するために、「とんど」の概要と「とんど」製作者の意識について、クイズやインタビュー動画により学習した。2回目では、「とんど」を維持するために自分自身ができることを提案・選択することを目的として、「とんど」の実態や課題について学び、その後、課題解決につながる方法を児童が提案する学習を行った。学習後、児童へのアンケートから、地域の課題を理解し伝統行事を継承していく態度が身についたことが読み取れた。

## ローカル線から観光列車までの鉄道観光の歩み —伊予市双海町の事例から—

陳 鈺珊 (広島大・院)

従来の鉄道と観光の研究は、分かれて考えることが主流である。ただし、近年は、鉄道が単なる移動手段として捉えるだけでなく、鉄道そのものが観光の目的となる現象についての研究は増加傾向にある(土谷・高原・平林 2014)。

鉄道と観光の研究を四種類に分類すると、鉄道の本源である交通機能、鉄道観光の歴史、観光における鉄道の役割、観光において鉄道と地域の連携を対象にした研究に分けられる。観光列車を活用することで地域活性化を達成できる可能性が指摘されている(藤田・榊原 2018)。

そこで本研究は、文献の統計と分析および鉄道沿線のローカル観光関連事業者に対するインタビュー調査を用いて、1) 伊予市双海町における鉄道観光の形成、2) 鉄道観光による伊予市双海町の変容と発展を明らかにする。

輸送人員過少で経営苦境に陥っている JR 四国の松山駅から八幡浜駅までの区間において、2000 年前後からの鉄道ファンの活動やロケ地巡礼と 2010 年代からの SNS 発信による下灘駅は人気になり、「夕焼けビールトロッコ列車」、「伊予灘ものがたり」観光列車が伊予灘線の海沿い区間で運行されている。沿線の伊予市双海町は、行政・鉄道会社・地域おこし協力隊・地域住民により、鉄道観光をきっかけに、宿泊・物販事業とおもてなし隊の活動が展開され、ある程度の変容と発展を遂げている。

## 兵庫県但馬地域における但馬牛関連碑の分布とその特徴

### - 3つの蔓牛に着目して -

富田大智（林野庁近畿中国森林管理局鳥取森林管理署）

但馬牛は兵庫県但馬地域で古来より飼養されてきた黒毛和種であり、良牛として他地域へも流通した。良牛の形質を残していくために但馬地域では、同じ家系内の牛同士を交配させ、他県の牛と交配させない閉鎖育種という方法により、優れた形質をもつ蔓牛が形成された。但馬地域は険しい山間地であり、牛の行き来が難しいことから、流域ごとに独自の蔓牛が形成されたといい、岸田川流域の「ふき蔓」、矢田川流域の「あつた蔓」、竹野川流域の「よし蔓」が代表的である。

本研究では、各流域にみられる但馬牛に関する石碑の分布から、各流域と各蔓牛との関係を地理的・歴史的に示すことを目的とする。現地踏査から、岸田川流域にふき蔓関連碑 1 基、矢田川流域にあつた蔓関連碑 4 基、竹野川流域によし蔓関連碑 1 基を把握し、現在の但馬牛のほとんどの祖先とされるあつた蔓に偏る傾向がみられることが示唆された。当日は更なる現地踏査の結果を踏まえて発表する。

## 中学校社会科地理教科書掲載の景観写真の

### 質・量的変化と読み取り技能について

久保哲成（兵庫県立柏原高/兵庫教育大学・院）

「地理的な見方や考え方及び地図の読図や作図、景観写真の読み取りなど地理的技能を身に付けることができるよう（中略）指導すること」と平成 10 年公示・告示以降の中学校学習指導要領社会科地理的分野において記されている。このことは景観写真の教育的価値を向上させたと思われる。教科書の本文に掲載されている写真の質・量的変化を分析すると、写真の掲載枚数が増加し、また、人物を写した文化景観の写真が増加していることがわかった。また、各教科書で景観写真の読み取り技能を修得するコラムを設け、景観写真の読み取りの意義とその技能を解説している。読み取りの技能については、読み取りのポイントを示し、そのポイントから読み取るべきものを問いを立てることにより明確化している。しかし、この読み取りのポイントや問いの方向性が自然的条件のみの読み取りを促す傾向にある。平成 29 年公示・告示の学習指導要領では「世界各地の人々の生活の特色やその変容の理由と、その生活が営まれる場所の自然及び社会的条件との関係を考察するに当たって、衣食住の特色や、生活と宗教との関わりなどを取り上げるようにすること」とあるように、社会的条件からの考察も強調されている。そこで今回は、世界各地の人々の生活の特色を社会的条件からも読み取ろうとする景観写真読み取りのフレームワークに関する考察を発表する。

## 第二次世界大戦下の広島市街地における 建物疎開の分布とその特徴

佐藤拓実（元広島大・学）・熊原康博（広島大）

建物疎開とは、空襲による火災の延焼を防ぐために、第二次世界大戦末期の主要な都市中心部において建物を取り壊して防火帯（疎開空地）を建設する防空事業である。石丸（1989）は、広島市の建物疎開について先駆的に研究を行い、その執行範囲と戦前の都市計画街路案には多くの共通点が見られ、建物疎開が都市計画的な意図を持って行われたことを明らかにした。本研究では、1939年12月、1945年4月、同年7月に撮影された空中写真をオルソ化し、QGIS上で広島市内の建物疎開の変遷やその特徴について分析を行い、下記の点を明らかにした。

1) 石丸（1989）の結論とは異なる、都市計画街路網と疎開空地の範囲が一致しない箇所がある。具体的には歓楽街や運河沿い、軍関連施設周辺で建物疎開が行われた。2) 疎開空地は時期によって実施範囲に違いがある。1945年4月以前では、駅周辺と、中心部を南北・東西に横切る大規模な疎開空地が造成された。4月以降では中心部から離れた地域で小規模な帯状の疎開空地、中心部では重要な建物を取り囲む疎開空地が造成された。

## 広島県における平成期の神社の管理の変化 —広島県神社誌と神社庁資料との比較—

沈 彧馨（広島大・院）

本研究は、人口減少社会となった平成期に、神社数が多く、地理的な条件の差が著しい広島県を対象として、県内の神社管理の変化の特徴と、人口変化との関係性を明らかにする。神社管理の変化を把握するために、「広島県神社誌」（1994（平成6）年発行）の属性データと広島県神社庁から提供を受けた神社に関する2020（令和2）年のデータを比較した。分析は、神社庁の支部単位（県内24支部）で行い、対象の神社は約2000社である。

宮司が常在する本務社と、他の神社の宮司に管理される兼務社で、神社を区分したところ、平成期において、本務社数に変化のない深安・安芸・山県東の各支部以外、本務社の数はすべて減少し、減少率が著しい支部は、神石・比婆西・沼隈であった。また本務社と兼務社の距離の変化をみると、神石・因島瀬戸田・比婆西の支部の本務社の宮司が、兼務社に移動する距離が伸びたことがわかった。さらに、人口の減少率が高い地域の支部であるほど、本務社の減少率が激しい傾向が認められ、過疎化の進行が神社管理にも影響しているといえる。



## 郷土資料に基づく 1945 年枕崎台風による 死者数の再検討と地図化

岩佐佳哉\* (広島大・学振 DC) ・ 杉山愛実 (広島大・学) ・  
村上正龍 (広島大・学)

1945 年 9 月の枕崎台風では広島県で 2,012 人の死者が生じたとされ、そのうち市町村が判明しているのは 1,915 人である (広島県土木建築部砂防課編, 1997)。しかし、終戦直後に生じた災害であったため、被害調査が十分でなく、死者数や死亡場所については不明な部分が多い。例えば、上記資料で死者の記録がない現東広島市において、死者がいたことが現地調査で明らかになった (岩佐・熊原, 2020)。

本発表では、自治体史や被災者の手記などの郷土資料の収集と現地調査に基づいて広島県における枕崎台風に伴う死者数を再検討した。その結果、上記資料で死者数の記載がない市町村において死者の記載がある場合や市町村における死者数が一致しない場合が認められた。県内における死者数は少なくとも 2,089 人であることを明らかにした。また、郷土資料の中には死亡した場所が記されているものがある。この位置をマッピングし、斜面崩壊の分布を重ねて WebGIS として表現した。枕崎台風の被害をオンラインで閲覧することができ、地域の過去の災害をリアルに捉えるための防災資料となりうる。

## インドにおける新型コロナウイルス (COVID-19)

### 感染動向の地域的特徴

#### —2020 年の州別データの分析を中心に—

勝又悠太朗 (広島大) ・ Thakur Gajender (広島大・院) ・  
赤井理子 (広島大・院) ・ 月森義基 (元広島大・学)

本報告は、インドにおける新型コロナウイルス (COVID-19) 感染動向の地域的特徴を明らかにすることを目的とする。分析データには、[covid19india.org](https://covid19india.org) が収集・整理し、ウェブサイトで公表しているものを使用する。そのうち、インドで COVID-19 の感染者が初めて報告された 2020 年 1 月 31 日から 12 月 31 日までの感染者数のデータを中心に分析する。州別の感染動向をみると、4 月まではマハラシュトラ、グジャラート、デリーの 3 州で感染者が多く、5 月にはグジャラートの感染者数の増加ペースが鈍化し、タミル・ナドゥにおいて大きな増加をみた。こうした傾向は 6 月も続いたが、7 月、8 月になるとカルナータカとアーンドラ・プラデーシュでの感染者の増加が顕著となった。9 月にはこれら州での増加ペースが低下し、10 月にはインド全体の新規感染者数は減少に転じた。一方、こうした中で、これまで感染者が多く確認されなかったケーララにおける増加が顕在化し、12 月には新規感染者数が最多の州となった。

## 広島、境港、神戸に訪れたクルーズ観光者の 行動と満足度の比較

劉 雅茜\* (広島大・院) ・フンク・カロリン (広島大)

観光庁 (2016) 等により作成した『明日の日本を支える観光ビジョン』の資料に、大型クルーズ船が寄港地にもたらす経済効果は、寄港地により違いがあるが、少ない場合でも乗客 1 人当たり 1 万円/回程度であり、多い場合では乗客 1 人当たり 14 万円/回程度に及ぶと指摘した。すなわち、クルーズ船の寄港により寄港地に大きな経済効果をもたらすことが期待できる。世界クルーズ市場の拡大に伴い、近年クルーズ船が日本へ寄港回数、クルーズにより訪日する観光者も増えている。2020 年からのコロナウイルスの影響で、日本及び世界クルーズ船の運行もほぼ休止し、クルーズ旅客数と寄港回数が一気に減っていたが、本研究はコロナになる前、2019 年に広島、境港、神戸に実施されたアンケート調査の結果を基に、経済、文化、景色などが異なる地域に訪れたクルーズ観光者の行動と満足度の差異を明らかにしたいと考えている。

## アート作品による空間の創出と場所性の表現

松井恵麻 (大阪市大・院)

新型コロナウイルスの世界的流行によって、大規模な人とモノの移動を伴うアートイベントは開催と延期の岐路に立たされている。こうした中で、オンライン上に活路を見出した事例は少なくない。コロナ禍以前は移動手段の発達によって、コロナ禍では通信技術の急速な発達によって、アートイベントでは空間的隔たりが克服されてきた。

本報告では、生活ペースの加速化が空間を消滅させる過程を考察した D・ハーヴェイの「時間－空間圧縮」という概念を手がかりに、2019 年から 2021 年までの小豆島におけるアートイベントを分析する。対象事例とするのは「瀬戸内国際芸術祭」小豆島会場に常設展示された作品群と、同じく小豆島で地元企業が推進するアートプロジェクトである。この二例では、空間がいかに整備され、場所性の表現がいかに変化したのか考察する。それによって、小豆島ではコロナ禍においても「時間－空間圧縮」といえる状況が進んでいること、また地域内に新しい協働関係が生じていることが明らかになった。

## 大阪市における中国人ニューカマーの エスニック・ビジネス空間 —日本橋・島之内地区を中心に—

田 宇博 (立命館大・院)

本研究では、大阪市日本橋・島之内地区における中国人ニューカマーのエスニック・ビジネスにおける集積過程、集積要因及び商業的特徴について考察した。さらに、中国人インバウンドの増加とソーシャルバイヤーの発展を背景とする中国人ニューカマーのエスニック空間の形成プロセスを明らかにした。

大阪では急激に増えたインバウンドを背景に、経済条件や観光動向の変化によって、2015年以降エスニック・ビジネスの規模が大きくなった。日本橋・島之内地区は、在日中国人を対象とした従来の飲食店や生活サービスが集積する一方、中国人インバウンドやソーシャルバイヤーなど、母国に居住している中国人を対象とした免税店・越境E・C貿易会社や物流会社などのエスニック・ビジネス事業所が集積するようになっている。このように、日本橋・島之内地区は日本国内におけるグローバルな経済変化を反映したローカルな拠点として、新しいエスニック・ビジネス空間である。

## 児童文学の中の地理空間と作者の「原風景」 —コロボックル物語を事例に—

劉 暁一 (広島大・院)

文学の中の地理空間は主人公の生活する空間であり、ストーリーが発生する場所として、物語の中で欠かせない構成要素であり、物語の基礎的要素とも言える。児童文学の中の地理空間は読者の子どもたちに容易にイメージできるように作者より工夫を凝らして誕生したもので、それは作者の心の奥にある原初の風景である「原風景」に影響を受けていると考えられる。

本研究は、佐藤さとるによる『コロボックル物語』シリーズに描かれる架空の地理的要素を分析し、作品におけるファンタジーの世界の構築とその特徴を読み取り、文学作品における地理空間の創作と作者が経験した環境との関連性を見いだすことを試みた。作者の「原風景」と作品の架空空間との関係について、物語の中の地理的要素の記述と現実世界の場所の整合性について地図から検討した結果、仮想空間である物語の舞台は佐藤さとるの原風景である横須賀市と横浜市の現実空間と関係が深いことを明らかにした。

## 「コミュニティ」の機能再編と資源活用

### —山形県鶴岡市三瀬地区を事例に—

筒井一伸\*（鳥取大）・渡辺理絵（山形大）

元来、農業用語であった「地域資源」という概念が拡張され、農山村の活性化を意図して活用の議論がみられはじめたのは1990年前後からである。その後、生産主義からポスト生産主義へと農山村のとらえ方が変化するなかで、農林産物そのものだけでなくそれを活用するイベントも広く行われてきた。一方、その資源活用の主体として「コミュニティ」に着目すると、1970年前後の「第一次コミュニティ政策ブーム」による再編、そして平成の市町村合併に呼応した「第二次コミュニティ政策ブーム」ともいべき新しいコミュニティの議論と地域運営組織設立による再編がある。本報告は中間農業地域に分類される山形県鶴岡市三瀬地区で1973年から半世紀近く続く「八森山孟宗まつり」を例に、第一次コミュニティ政策ブームの下での三瀬地区自治会の設立とその後の機能再編の実態を報告するとともに、「ふるさと資源」を鍵概念に八森山孟宗まつりの活用意義の変化についても考えてみたい。

### 井の上の能登らしさ—地域性と消費—

吉田国光（金沢大）

先進国の縁辺地域においては、人口の圧倒的に集中する都市部の日常生活では触れられないロカリティなどを喚起させるような有形、無形の様々なモノが商品とされ、消費の対象とされてきた。このうち日本では、料理が代表例の一つに挙げられる。こうした料理として、最近では伝統的な郷土料理だけではなく、経済振興を目的とした「ご当地グルメ」が新たに開発される事例も散見される。

本研究では、奥能登地域で新たに「ご当地グルメ」として創出された「能登井」を事例に、地元の料理人によって、ローカルな食材がいかに選択され、どのように井の上で「能登らしさ」が表現されてきたのかを明らかにする。聞き取り調査をもとに、各飲食店がオリジナルな能登井をどのように考案してきたのかを分析する。そして各料理人が選択した井上で示されるロカリティと、観光客等の外部者から消費の対象として井上に求められるロカリティの関係性から、能登井という営みが継続する要因を考察する。

## 地域包括ケアシステムをめぐる圏域の 再編と地域包括支援センターの再配置

杉浦真一郎\* (名城大)

本発表では、鈴鹿亀山地区広域連合（三重県鈴鹿市・亀山市）の地域包括ケアシステムをめぐる、日常生活圏域の再編と地域包括支援センターの機能再配置について報告する。同広域連合では、2006 年度に同システムを、鈴鹿市で 4 圏域 4 包括の、亀山市で 1 圏域 1 包括の体制でスタートさせた。圏域数が限られた理由は、域内の社会福祉法人や医療法人による地域包括ケアに対する認知度や理解が低調で、また受託しうる社会福祉法人の数も限られていたためである。しかし、従来の圏域数ではカバーする面積が広く、高齢者人口の増加がきめ細かな対応を難しくさせていたため、鈴鹿市を 8 圏域に、亀山市を 2 圏域に再編した。再編が実現した背景には、地域包括ケアが始まって以降の 15 年で、包括の受託運営の担い手となりうる法人が増加したことがある。しかし、各法人で包括に必要な専門職の確保が容易でない点は、業務の充実や将来の再々編にとって大きな課題となっている。

## 2020 年東京五輪大会におけるホストタウン —登録自治体へのアンケート調査結果報告—

成瀬 厚 (独立研究者)

東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会において、外国から参加する競技選手・チームが事前合宿する場所を日本各地から募集し、ホストタウンという名で政策を実施している。それは地方自治体が相手国・地域との交渉を行ったうえで、内閣官房に設置された事務局に申請・登録し、その事業に財政的助成がおこなわれる。報告者はホストタウン登録を行った自治体に対し、東京五輪大会の延期が決定される前の 2020 年 3 月までにアンケート調査を行い、218 の回答を得た。本報告はその回答結果のうち、相手国・地域の選出に関わるものを集計・分析したものである。

ホストタウン登録は、参加国の事前合宿を支援するスポーツ本来の目的と、歓待の意を込めた国際交流という自治体側の目的とがあり、アンケートの回答では、その割合が 6 : 4 程度だった。事前合宿を主目的とする場合は過去の国際大会での合宿実績があったり、当該自治体で当該競技が盛んであったりしていた。国際交流を主目的とする場合は、姉妹都市提携や政治・経済的なつながりを活用していた。

2021 年度地理科学学会春季学术大会一般研究発表要旨集



〔編集・発行〕地理科学学会 集会専門委員会

〒739 - 8522 東広島市鏡山 1 - 2 - 3

広島大学大学院文学部地理学教室内

TEL : 082 - 424 - 6656 FAX : 082 - 424 - 0320

<http://www.chiri-kagaku.jp/>